

(別紙様式3) **令和6年度学校評価学校関係者評価報告**

学校名〔 京丹後市立いさなご小学校 〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題		本年度学校経営の重点（短期経営目標）					
教育目標「ふるさとを愛し 多様な人とつながりながら学び探究し続け子どもの育成」 目指す子ども像 1 主体的に学び続ける子ども 2 人を思いやり仲間と共に高め合える子ども 3 粘り強く挑戦し続ける子ども		コミュニケーション能力の育成を重点としてすべての教育活動に位置づけ3年間取り組んできた。「お互いを認め合う」学級づくりを進めることにより、自分の得意なことでも力を発揮でき、自分の居場所を感じることができた。学習の場面では、ペアやグループを活用して、人とのやり取りができるが、日常生活の場面では、うまく関われない状況があるので、今年度は「人との関わり」を重点に安心できる学級・学校づくりを進める。		目指す子ども像を具現化する重点 1 自ら考え判断し、行動・表現する力を向上させる。 2 自らの時間と力を周りの人のためにも使い、他者に貢献する意欲と態度を育てる。 3 自らの目標を設定し、自分で調整しながら根気強く力を育てる。 4 保護者、地域から信頼される学校づくりを推進する。					
評価項目		重点 目 標		具 体 的 方 策		成果と課題（自己評価）		学校関係者評価	
学校教育指導の重点、保幼小中一貫教育の諸計画及び各学園の重点等を基盤として	教育課程 学習指導	1 目標を明確にしたうえで、児童に理解させるために有効な指導方法を工夫する。 2 探究的な学びのある授業に挑戦しようと思えるような研修を行い授業デザインのイメージを持つ。		1 ペアやグループで人と関わりながら学ぶことを継続し、主体的に自分が授業に参加できる授業を研究していく。学力充実、生徒指導、特別活動、特別支援教育の視点で研究授業を行い、教員が学び合う。 2 探究的な学びが構成しやすい教科や単元での授業デザインの見通しを持つ。学習の振り返りを行い、なぜだろうと思ったことを個々に整理し、次の授業に結びつける。学級の実践を全体のものとするために発信する方法を工夫する。 3 意見の交流や調べたことのまとめ下書きなど、ICTを活用する。アプリを活用したドリル学習を取り入れながら、基礎の定着につなげる。		○「人と関わる力の育成」を重点とし、ペアやグループで交流しながら自分の学びを深めていく授業を展開し、児童が友達と交流しながら学ぶ良さを感じられた。 △学び合いながら、その時間に習得する内容を定着させきることに弱さがあった。 ○自分で課題（問い）を見つけて、追究していく授業づくりを進め、自分で考えたいという意欲が持てた。 ○生徒指導・特別活動等の視点で6回の研究授業を行い、教員の授業研究の機会となった。		・授業では、一緒に学習して、友達から吸収しようとしていた。将来的に自由に考えられるようにすることが大事である。 ・自分で課題を見つけて追究し、探っていく家庭学習が必要である。	
	生徒指導	1 いじめ防止・不登校未然防止となる取組を進める。 2 自己存在感・共感的な人間関係・自己決定の場を取り入れ、安心・安全な居場所とし、互いを認め合う集団をつくる。		1 道徳や特別活動等を通して、自分の思いを伝えたり、友達の意見を受け入れたりして、望ましい人間関係をつくり、いじめを生まない雰囲気を醸成する。 2 不登校を未然防止するためにも、居心地の良い学級・学校をめざし、児童同士の関係づくりや、児童と担任の信頼関係を築く。 3 互いの個性や価値観の違いを認め、自分の得意なことを実感させ、違いがあるから友達と関わる意義があることを指導する。「今の自分」に自信を持ち、さらに良さを伸ばす意欲が持てるように指導する。 4 学級活動や異年齢集団での活動における、行動価値として、他者貢献の視点を常に伝え積み重ねていく。		○「居場所がある」と思える学校・学級づくりに努め何でも話せる雰囲気を醸成し、困ったことを伝えれば担任・友達に伝えて解決できる体験を重ねた。 ○自分の良さを友達に見つけてもらったり、自分の得意な力を発揮したりして、友達とは違う「自分」に自信が持てるようになった。 ○不登校児童が教室に戻れるように組織として関わり、3学期から教室で学習できている。学級での自然な関わりが安心できる環境であった。 △相手のことを考えない言動は減らない。その都度、自分の行動を振り返り指導を続けている。		・挨拶は一番初めのコミュニケーションであるので、自分からしてくれるのはうれしい。 ・6年生が一生懸命頑張る姿を下級生が見て、自分達も下の学年と関わる活動があるのが良い。 ・自分は人の役に立っていると考えるようにしてほしい。 ・自分の得意がわかると、自分に自信を持てるのではないかと	

健康（体育）・安全	1 積極的な児童への指導、保護者への啓発により、自分自身の心身に関心を持たせる。 2 自分で目標を設定し、困難なことに粘り強く挑戦しようという意欲を高める。	1 健康安全部が中心となり、各学期1回の保健指導や「ほけんだより」の発行により、睡眠やメディアコントロール等、自分でコントロールできる力を伸ばす。 2 学習・取組において、個々の目指す目標を設定する力を身につけ、目標に向かって取り組み、振り返ることを繰り返しながら、小さな成長があることを実感させ意欲を高める。	○「ほけんだより」や心・体・いのちの学習、食に関する指導を行い、生活習慣等自分で気を付けて生活しようとする児童が増えた。 ○自分で目標を設定して取り組み、過程を振り返ることにより、目標達成に届かなくても成長できたと感じる児童が増え、意欲が持続した。 △結果がすべてではないとわかっているが、できなくてあきらめてしまうことも多い。できなくても挑戦してみようという学級の雰囲気をつくっていく。	・「目標を達成しなくても成長している」と評価しているのが良い。あきらめずに挑戦する姿勢を育ててほしい。 ・メディアコントロールについては、自分でコントロールできるようにメディアリテラシーの指導も必要である。
特別支援教育	1 特別支援教育についての理解を深める。(児童・教職員) 2 支援を要する児童を中心に、すべての児童に対して合理的な配慮を心がけ、適切な支援を行う。	1 特別支援学級や通級指導教室について、児童の実態や指導方法についての研修を行い、教職員のアセスメント力を伸ばしながら、通常学級に在籍する児童への支援についての力量を高める。 2 スクールカウンセラーやまなび生活アドバイザー、与謝の海地域支援センターと連携し、児童への適切な支援を探る。個に応じた支援については、保護者と方向性を確認しながら進める。	○肢体不自由学級が新設されたのをきっかけに、理解教育の中に車椅子のことも加え「みんなが過ごしやすい学校」を考えた。 ○スクールカウンセラー、まなび生活アドバイザーと連携し、助言を受けながら適切な支援方法を探った。児童の見立てを教えてもらう中で、アセスメントの力を伸ばす機会となった。 △適切な支援について研修を進める。	・「ちがいがあって当たり前」ととらえて、多様性を認めて、それぞれが力を発揮できるようにすることが大事である。
開かれた学校づくり	1 学校や児童の様子を積極的に発信し、教育活動の向上と信頼される学校づくりにつなげる。	1 学校だよりや学級通信、ホームページを活用して学校や児童の様子等を発信して理解を得る。そのために、取組の目的や方法をわかりやすく伝える工夫をする。 2 校区探検や地域にある施設や事業所等の見学を行い、校区・峰山町のことについて学ぶとともに、地域人材や学校支援ボランティアを活用して地域の方とのつながりを広げる。	△学校便りやホームページで学校の様子を発信したが、取り組みの目的の伝え方について工夫し、発信方法を改善したい。 ○地域にある施設見学させてもらい、普段気づかなかったことを学習することができた。 ○学校支援ボランティア・いさなごっ子見守り隊の方々へ協力いただき、児童は安心して学校生活を送れた。	・地域の人は、学校便りが回覧で回ってくるのをとても楽しみにしておられる。写真等で学校の様子を伝えてほしい。 ・校区にある施設や会社の見学をして、何をしているところなのか理解することが良い。
次年度に向けた改善の方向性	・変化し続ける社会に対応できる力を育成するための学習指導。生徒指導について研究し、保護者・地域に発信する。 ・自分で考え、児童が主体となる授業や特別活動を連動させ、安心して過ごせる学級集団作りを進める。 ・人との違いを認め合ったうえで、人と関わりながら力をつけていく ・スクールカウンセラーなどの外部機関と連携し、方向性を明らかにしたうえで、個別に適切な支援を行う。			・児童が自分で考えるヒントを学校・保護者がどのように与えるかが大事である。